

俗臭

織田作之助

青空文庫

一

最近児子政江はパアマネントウエーヴをかけた。目下流行の前髪をピンカールしたあれである。明治三十年生れの、従つてことし四十三歳の政江はそのため一層醜くなった。つまりは、なか／＼に暴挙であつた。

かつて彼女は隆鼻手術をうけたことがある。日本人ばなれする程鼻は高くなつたが、眼が釣り上つて、容色を増した感が少しも起らなかつた許りか、鏡にうつしてみて、まるで自分でもとつき難い顔になつた。三月経つて漸くその顔に馴染んで来た頃、鼻

の上の蟻がとけ出した。その夏大變憂鬱な想いで暮さねばならなかった。手術料は五百円だったということだ。

僅に、卵巣切開手術や隆鼻手術のような高級な医術に自発的に参加するのには、余程の医学的知識と勇氣、英断を要するものだという持論が彼女を慰めた。政江の周囲には予防注射をすら怖れるような見^{「みつ」}ともない人間ばかりが集っている。この事実がいつも政江を必要以上に勇氣づけるのだった。無智無学の徒を尻眼に、いわばこの女は尖端^{ひと}を切るのである。総て斯様なことは、政江が若い頃、詳しくいえば十八歳から二十一歳までの足掛け四年間、京都医大附属病院で助産婦見習兼看護婦をしていたこと、關係がある。

看護婦時代、醜聞があつた。恋愛という程のものではない。相手は学校出たての若い副手達である。教養ある大学出の青年だから、尊敬の心もあつた。いい寄られて抵抗しなかつた。いつものことだつた。好奇心に富んでいたからである。青年達は、宮川町などの遊廓で遊ぶ金かなり節約出来た筈だ。それどころか、それよりも得るところがあつた位である。一人二人に止まらなかつたから、もし美貌だつたら、病院内で多少の刃傷沙汰が起つたかも知れぬ。騒がれたという点で、その頃のこととは甘い想出となつて未だに彼女の胸に残っている。このことが、政江の医学的なものへの憧れの一つの原因といつてもよい。

先年、四人の娘を産んで、五人目に跡取りの男子を出産したの

を機会に、避妊のため、卵巣切開手術をうけるべく、政江はわざ／＼京都医大に入院した。が、知り合いの医員は一人も居らず、たった一人、頭の禿に見覚えのある守衛がいた。彼は五円紙幣を無雑作に恵まれて驚き、「あんたはん。えらい出世おしやしたどすな」といった。それで、辛うじて期待が報いられた。あれから二十年経っているのだという感傷よりも、その歳月がもとの助産婦見習を百万長者の奥さんにしてしまったという想いの方が、政江には強かったのだ。知り合いがいなければ、誰がこの事実に驚いてくれるだろうか。

卵巣切開によりほのかに残っている色気を殆んど無くしてしまつたが、もともと彼女は百万長者の御寮さんという肩書の為に幾

分損をしているところもある。が、このたびのパアマネントウェーブは彼女の醜貌を決定的にしてしまったと周囲の人々は口喧しく騒いだ。

「娘ももう年頃になったことやさかい、私も今までとは交際「つきあ」

いが違ちがて来まつしやろ。今まで通り旧弊な髪結うてたら娘の嫁入

り先に阿呆にされまんがな。今日日はきょうびパアマネントオーの一つ位

掛けんことには、良家えいとかの人と交際も出来できまへんさかいナ。それ

に、何でんがナ。一ぺん掛けといたら半年は持つゆうことやし、

私もわたし髪さんで髪結うより安うつく、こない思いましてナ」

と政江はいいふらした。今まで「私」わて「私」わてと云っていた彼女

が、この時打って変った様に「私」わたしと上品な云い方をを用い出した

ことは、人々、就中、政江の義妹たちの注目をひいた。この変化は何に原因するのかと考えた揚句、かすかに思い当る節があつた。

東京の崎山某という紳士がちかごろ頻繁に東京大阪間を往復して兒子家^にに出入している。最初崎山は代議士であると誤解されていた。が、違うらしいのだ。どうやら、立候補すらしたこともないというのが本当らしいのである。が兎に角、彼はまるで口笛を吹くような調子で議会政治を論じ、序でに国策の機微にも触れ、いつてみれば一角^{ひとかど}の政客の風格を身边に漂わしていた。不思議に、ついぞ名刺というものを出したことがない。このことを一番不満に思ったのは政江の義弟の伝三郎だ。何かにつけて有名無名

の士の名刺を頂戴することを商売の秘訣と心得ているのである。

かつて崎山と一座した時、伝三郎は例によつて、名刺をねだつた。

「名刺一つおくなはれな」

「あはゝゝゝ」とその時崎山は大声で笑つて、「名刺は持ち合
わさんので……」とタバコの空箱の裏に住所氏名を書いて与えた。

赤坂区青山町とあるのを見て、伝三郎は、

「あんさん、えらい粋な所ところに住んだはりまんナ。こゝ、これを囲
うたアる家と違いまんのか」と小指を出したということだ。赤坂
という地名から専ら色町を想像したのであろう。崎山は、その小
指を悠然と見下ろし、葉巻をスパク吸うていた。崎山が煙にむ
せて少し眉をひそめたのを見て、政江は眉をひそめた。内心義弟

の口軽さをとがめたのだ。が、政江もかつて崎山に、

「あんさんらは、何でんナ、青切符が無料たゞでおますよつて、旅する云うても結構でおますナ」と言つたことがある。代議士でないとするれば崎山といえど汽車の切符が無料である筈はない故、政江の云い方は随分早まつたことになる。その時崎山某は、

「いやあ、之は恐縮ですなあ」と苦笑したということだ。確なことを面と向つて訊くのも妙な工合だという遠慮から、崎山の身分に就は総て曖昧のまゝだった。どうしても良かったからである。

「東京の人は金も無い癖にえらい威張つたはる」という印象で簡単に片がつくのだ。重要なのは崎山の持つて来た話だけだ。――

政江の長女千満ちま子の縁談であろうと人々はにらんだ。その通りだ

った。政江は極秘にしていたが、人々には、今度の縁談の相手が、某伯爵家の次男で、東京帝大出、高文もパスし、現在内務省計画課の官吏であると、すっかり調べあがっていた。この縁談が成立すれば政江は伯爵家の何かに当る訳だ。「私」^{あて}が「私」^{わたし}に変わり、耳隠しがパアマネントウエーブに成るのも満更不思議ではない――と人々は思い当ったのである。

それにしても不思議なのは、政江が誰にもこの話を云い触らさず、伯爵のハの字もいかなかったことだ。一年前今程良い話といえなかったが、それでも政江の虚栄心を満足さすに足る縁談があった。大阪商工会議員の長男といえ、少くとも大阪で一流だ、とその時政江はすっかり逆上してしまったのだ。それだけに、こ

のたびの彼女の慎重さは注目には価するものがある。あるいは、余りの話の良さに、あらかじめ破談を怖れてのことかと想像された。この前の縁談が破談になった時、誰彼にもいい触らしていたゞけに、随分面目ない想いをした筈なのだ。苦い経験が彼女を慎重にしたのだろう。——それに違いは無かった。が、さすがの彼女も一人位は聴き役が必要であつた。女中のお春がさしずめこの役にあづかった。よつて、総てはお春の口からもれたのだ。お春の話を聞いた時、人々は即座に、某伯爵家はいわゆる貧乏華族で、千満子の持参金は五万円乃至十万円だと、決めてしまった。また、この縁談は成立しないだろうと、簡単に予言した。前のはなしの破談になった原因が原因だからというのである。その当座、いろ

く、と臆測されたが、就中政江の義弟たちは、政江がもと助産婦をしていたことが忌避されたのだと取沙汰した。その妻たち、即ち、政江の義妹たちは之をきいて非常に喜んだ。夫婦相和した訳だ。義妹たちには、しかし、もう一つの言い分があつた。商工会議員の長男なら、千満子の容貌では不足だったろうというのだ。

しかし千満子は鼻と背が幾分低いという点を除けば、むしろ美人の方だから、彼女等の言い分は不当であろう。彼女等の夫はそれ／＼、姪の容貌に就ては大いに弁護するところがあつた。

政江は、義弟の一人である千恵造の行状を破談の原因だと思い、自ら信じて疑わなかつた。

兒子権右衛門を頭に、順に市治郎、まつ枝、伝三郎、千恵造、三亀雄、たみ子の七人きようだいの中で、千恵造は兒子一家の面汚しとされている。穀つぶしの意久地なしというのが定評だ。大變氣が弱いということは記憶に止めて置く必要がある。元來彼等きようだいの出生地、和歌山県有田郡湯浅村（現在湯浅町）は氣性の荒いので近村に知られた漁村である。大袈裟にいつて、喧嘩と博奕の行われない日はないといった風で、千恵造の様な氣の弱い「ぐうたら者」は全く異色なのだ。代々魚問屋で相当な物持ちだったが、父親の代に没落した。原因は博奕と女であつた。父親が死んで後に残つたのは、若干の借金と、各々腹ちがいの、二十八が頭、十七歳が末の七人のきようだいである。一家分散し、彼

等は大坂に出て思い／＼の自活の道を求めた。権右衛門は沖仲士、市治郎は馬力挽き、伝三郎は寿司屋の出前持、千恵造は代用教員、三亀雄は高利貸の手代、まつ枝、たみ子は女中奉公、いつてみればそれ／＼に苦難の道だった。大正元年のことだ。翌年まつ枝は好いた男と結婚したが、きょうだいには散り／＼ばら／＼で、誰一人婚礼の席に呼べなかった。五年後のたみ子の場合も同様であつた。が、大正十年、初めて彼等は天王寺区上本町八丁目の権右衛門の家で顔を合わせた。偶然ではない。権右衛門は既に一かどの銅鉄取引商人に出世していたのである。やがて市治郎、伝三郎、三亀雄たちも、兄のお蔭で立派な銅鉄商人となつた。が、千恵造はいつまでも権右衛門の家にごろ／＼し、帳場に使われてい

た。他の兄弟の様な、生馬の眼をぬく商魂がなかったのだ。その代り、代用教員をやれるだけあつて筆が立つた。伝三郎にいわせると、「字のよう書くものに碌な奴はない」

娶^{めと}つたが故あつて離婚した。妻の実家が権右衛門と取引して七千円の損害をかけ、権右衛門との間に訴訟が起つたのが原因である。色白の、眼の凶抜けて大きな可憐な女だった。しかも東京生れの、言葉使いの齒切れよい、分に過ぎた女房であつたが、千恵造は兄の命ずるまゝに従つた。破産した実家へ妻を帰らすに就て、彼は全く意久地なく振舞つた。暫く経ち、商用で名古屋へ行つた時、中村遊廓で、妻の妹に出会つた。下ツ端だったが、彼女は蒲田の女優だったのだ。二三度、女中の役で出ているのを見に妻と

一緒に常設館に行つたのも、ついこの間の事だ。女郎になつてゐる義妹と床を同じくして一夜を明かした時千恵造が發揮した人間味に就ては記述をさける。大阪に帰ると、彼は道頓堀や千日前のカフェーを飲み歩いた。肺が悪く、一度三合許りの血を吐いたが、翌日もカフェー遊びはかゝさなかつた。酔えば女給を相手に何ごとかをぼそ／＼と愚痴るのだ。毎夜必ずビールを五六本、酒を五六合、チャンポンにのんだ。それ位のんでも大きな声で物もいへぬ程気が優しく、働く女への想いやりもあるようで、あまり好い、お男子ではなかつたがあちこちでもてた。千日前楽天地（現在歌舞伎座）横町のカフェー喜楽の年増女給とねんごろになり、宝塚旧温泉で関係を結んだ。春美といつて二十六歳、かつて某浪花節

寄席の持主の妾をしていたことがあり、旦那は南五花街の遊廓で誰知らぬ者のない稀にみる漁色家で、常に春画春本淫具の類を懷中にしてゐる男であると、女は何を思い出したのか何もかも千恵造に打ちあけた。千恵造は唸った。場所が場所だったのだ。たつた今先、女は彼に三十六歳で始めて女の身体を知ったかの様な感銘を与えたのである。それに彼女はどちらかといえば、無邪気なところがあるだけにこの打ち明話は單なる閨房の話術を通りこして、千恵造の心に痛くこたえた。彼は便所に立ち、平氣やゝと呟いた。窓から武庫川の河原が見えた。五月の午後の太陽が輝いていた。この時の千恵造の心理状態は描写に値するものがあるが、こゝではその煩を避ける。直視しがたい様な自分の奇妙な表情を

洗面所の鏡にちらりと見て、千恵造は部屋に戻った。彼の顔は苦痛と情慾のために歪んでいた。その後たび／＼逢引を重ねた揚句、元来心根の優しい春美は、千恵造の情にほだされて、打ちあけるべき最後のものを打ちあけた。彼女は、詳述をはぐかるが、世人の忌み嫌うある種族の一人であつたのだ。「私が嫌いにならなつたやろ」といつて顔すり寄せる女の魅力に抵抗する力は千恵造にはない。何となく悲しい彼はその時自身の不幸を誇張して述べた。虫の鳴き声、青電灯の生駒山の連込宿で、二人はお互いに慰め合つたのである。いつてみれば恋愛の条件は揃つた。概ね打明け話は恋愛の陰影いろあいを濃くするという例に二人の場合ももれなかつたのだ。二人は結婚した。

政江とその夫権右衛門の許可を得ることは仲々むづかしかった。危く結婚し損うところであつた。伝三郎が「好いた同志やないか」と助け船を出した揚句、結局このまゝ無理に離婚させたことの償いとして許された。割に盛大な婚礼が行われたが、その夜、千恵造は何故かむしろ浮かぬ顔をしていた。宝塚旧温泉できいた女の打ち明話に今更悩んでいたのであろうか。

がともあれ、婚礼の夜の春美こと兒子賀来子かくこの著しく化粧栄えのした容貌は、人々を瞠目させ、千恵造は羨望された。伝三郎の言を借りると、千恵造は、「後々あとへ別嬪おなごな女子をもらつて、勝負した（うまくやったという意）」のだ。が、「勝負した」実感が起つて来るためには、彼は少くとも俺は勝負したのだと自分にい

いきかす必要があつた。婚礼の費用はざつと千五百円掛つた。

兒子家の権式を見せるために少くとも八百円余分の金が費されたのだ。が、そんなに金を掛ける必要は更々になかつたと、あとになつて人々就中政江は思つた。

婚礼の夜から一（ひとつき）月ほど経つたある日、政江は新家庭を訪問

した。玄関に出た賀来子の顔を見るなり、「実は賀来子さん、あなたに正直に答えてほしいことがおますねん。女の一生のことですよつて、嘘いわんといとくれやすや。あなたの血統のことで一寸人からきいたことがおますねん。あなたのお父さんは——」

終いまでいわさず、賀来子は、

「そうです。そうです」と叫んだ。捨鉢な調子であつたから、政

江は何かぎよつとした。稍震えた。

「矢つ張りそうでつか。それに違いおまへんな。ほんまにそうでんな。そうでつか。考えさしてもらいまつせ。主人と相談さしてもらいまつせ」

政江は興奮の余り、便通を催した。彼女は急いで帰宅した。その夜権右衛門は政江の口を通し千恵造に賀来子を離縁せよと申しつけた。千恵造ははなはだ煮え切らぬ態度を示した。それでも男かと極言された。が、翌日千恵造は男である所以を示した。千恵造と賀来子は駆落した。伝三郎がそれと知って梅田の駅へかけつけ、餞別に三十円の金を与えた。そのことが知れて、彼は権右衛門から出入を禁止された。

これは伝三郎には相当な打撃だった。もとの寿司屋の出前持ちから今では相当な銅鉄取引商人にはなっているものゝ、彼は酉年生れの派手な性質で金で面を張るのが面白いまゝに浪費が多く、纏った正金がなかったので、一万二万という大きな買ものにはどうしても兄の資本に頼る必要があつたからだ。だから、出入禁止をされた彼は屢々末弟の三亀雄に資本の融通をたのんだ。三亀雄はがっちり屋で、自分では貧乏やゝといいいふらしていたが、ものゝ十万円は貯めているだろうといわれていた。もと高利貸の手代をしていた時の根性が未だに残っていて、彼は兄の伝三郎に日歩三銭の利子をとった。伝三郎は三亀雄のたんげいすべからざる蓄財振りを畏敬していたので、諾々として利子を払ったが、その

利子のことで伝三郎の家庭で一寸したいざこざが起ったことがある。伝三郎はその時ひどく妻を折檻した。

「おん者^{しゃ}ら（和歌山の方言でお前という意）俺^{わし}の兄弟のこと悪う抜かすことないわい」

伝三郎は兄弟想いであつた。ともあれ、しかし、出入禁止は痛かつた。心配して仲にはいつてくれる者もあつたが、何分伝三郎が千恵造の駆落をそゝのかしたばかりか、いろ／＼千恵造の肩をもち、彼の弁護をしたということになつていたので、勘気はとけなかつた。

が、ある日の夕方、伝三郎に出てくれと、呼び捨ての電話が掛り、彼が出てみると、六ヶ月振りに聞く権右衛門の声が聞えた。

話がある、宅へ来てくれんかとのことで、伝三郎は夕飯もたべず、車を飛ばした。

「兄さんの好物や」と伝三郎が手土産に差出した鮑の雲丹漬を見て、権右衛門は、

「贅沢なことするな」といい、そして、「詳しい話は政江がする」と席を立った。政江は敷島三本吸ってから、話の要点に触れた。「実は千恵さんのことやが、あんた千恵さんの居所知ってるのやろ」

「……………」

伝三郎はあわてゝ坐り直した。座蒲団が半分以上尻からはみ出した。最近、千恵造から彼の所へはじめての便りがあったのだ。

千恵造夫婦は京城にいる賀来子の伯父を頼つて朝鮮に渡り、今は京城の色町で、「赤玉」という小さな撞球場兼射的場をひらいてさゝやかな暮しをしている、内地とちがい氣候が不順で困る、などとあり、この手紙のことは権右衛門の耳にいれぬ様にと念を押してあつた。それでなくとも、政江の前で、知恵造の話は鬼門である筈だ。伝三郎はウンともスンともいわず、たゞ曖昧な音を発音した。――が、何のために政江は千恵造の居所をきくのだろう。「あんた、隠さんと正直にいつとくれなはれや」政江の小さな三角型の眼が陰険に光った。正直にいつとくれなはれや、というのは政江の十八番だった。かね／＼伝三郎は嫂に頭が上らず、之に抵抗するのは容易でないのだ。

「へえ。――」

ありのまゝに言つた。もう一度、一生出入り差止めでも何でもしやがれと尻をまくつた氣持だつた。この所謂度胸は伝三郎の大きいに得意とするところである。酔つた時に概ねあらわれるのだが、この時は、この頃頓に増して來た政江の威嚴に圧されたのである。この度胸に就て一言するならば、例えば好んでやるオイチョ博奕カブに於て、彼の度胸は非常に高いものにつくのだ。これは彼のしばしば誇張するところのものだ。博奕での損を大袈裟にいうのを、伝三郎は非常に好むという癖がある。彼は近頃肥満して來て、大旦那の風格があると己惚れているのだつた。

さて、その時、政江の顔に微笑が浮ぶに及んで、伝三郎の度胸

はやつと報いられた。——伝三郎がわざ／＼呼ばれて千恵造のことを訊ねられたのには無論訳があつた。その頃、前述の商工会議員の長男との縁談が持ち上つていた。

「千恵さんがあんな女と夫婦やということが知れると聴合せの工合が悪いから」どうしても別れさ／＼ねばならぬと政江は意氣ごみ、伝三郎なら、手紙の一本位は来てるし居所は知ってるだろうと推測したのである。

「御尤も」と伝三郎は相鎚打った。内地にいるのなら兎も角、朝鮮にいる男のことが何で縁談のさまたげになるようななどとはこの際いうまじきことである。

「姪の婚礼の邪魔しよる。あいつは社会主義者や」

と伝三郎はいった。この言は仲々政江の氣にいった。伝三郎が千恵造の弁護をしているという誤解は之で解けた。出入は完全に許された。この時以後、政江は千恵造のことを話す時、社会主義者という形容詞をつけるのを忘れなかった。

一体に、伝三郎は仲々比喻の才に富んでいて、彼の用語には興味あるものが少くない。例えば、淡泊なお菜のことを、「金魚の餌みたいなもん喰わしやがって」、商人の談合のことを、「いちや／＼と○○○○してけつかる」などは、彼でなくてはの感がある。「社会主義者」というのもこの金魚の餌の類である。

さて、政江の依頼によつて、伝三郎が千恵造に離縁勧告の手紙を出すことに話がきまつて、この意義ある半年振りの訪問は終つ

た。伝三郎は字が書けぬので、番頭に手紙を代筆させた。社会主義者やと言うたつてくれと、伝三郎が念押すと、番頭はその言葉は不穩当だといった。番頭はこの頃男女間の道に分別ついて、千恵造の駆落ちにひそかに同情しているのだ。伝三郎は番頭の言葉をきかなかつた。社会主義者という字をいれるのは政江の希望であるからだ。番頭は、社会主義者という字にカツコをつけて、自分の意のあるところを千恵造に伝えようとした。が、結局それは思い過しだった。手紙を見た千恵造は、そのカツコを強調の符号だと思った。だから、あるいは平気で読み流してしまったかも知れないその言葉にひどく拘（こたわ）泥（どろ）つてしまい、そのため、姪の縁談の邪魔という肝腎の事柄に氣をとめなかつた。賀来子の方がこ

の事を気にした。彼女は、自分のために貴方が大事な姪の幸福をさまたげるのなれば、自分は犠牲になるといった。

「どうせ、私は不幸の性うまれつき来ですよって、覚悟はしてます」

その心根がいじらしいと思った千恵造は益々賀来子と別れがたく思った。賀来子にはその出生以外に何の欠点もない、その様な女を犠牲にしてまで小生は姪の世間的幸福を願わぬ積りだ、というような意味のことを例の煮え切らぬ調子で返事に書いた。愈々彼は社会主義的色彩を帯びて来た訳である。

「あいつの為に千満子の縁談は目茶苦茶になるやろ」

と政江は叫んだ。果して彼女の予言の通り、破談になったのは前述の通りだ。その原因に就て、いろ／＼取沙汰があったのも前

に書いた。千恵造のことが原因だという政江の言い分は、何かこじつけめいているが、周囲の人々は承認せざるを得なかった。が、真相をいうと、見合の時に、新郎たるべき人が、千満子に就てはなほだ滑稽な印象を感じたのが原因だ。

見合は、千満子のお琴の会という名目で行われた。会場の北陽演舞場で振袖姿の千満子が師匠と連奏するのを、新郎たるべき人が鑑賞したのである。彼は、師匠の悠然たる態度に比べて、千満子が終始醜いまでに緊張し赧面しているのを見て、自分が赧面している様な錯覚を感じた。総てこのことが原因である。彼はその後、ルンバ踊りの名手といわれたあるレビューガールと結婚したということである。

余談であるが、このお琴の会で政江が費った金は少く見積つて三千円と噂された。政江母娘の衣裳だけでも千五百円出入りの呉服屋に支払ったと、義妹たちは口喧しかった。この呉服屋は兒子家へ出入するだけで、娘を女学校へ通わせている。政江には四人の娘があり、最近彼女たちの正月の晴着を収めてたんまりもうけた呉服屋は、この正月には一家総出で白浜温泉へ出掛けようと思つている。兒子家では、この正月から年始の客に酒肴を出しても良いということになった。S銀行上本町支店から兒子権右衛門預金元利決算報告書が来て、権右衛門の預金が百万円に達したことが分つたからである。

二

振袖が襖の隙間から覗いたかと思うと、千満子、春子、信子、
寿子^{ひさ}の順に部屋にはいつて来た。正月の晴着だった。

「いよう！ 皆揃うたな。女^めばかり並びくさつて、こら、カフ
エーやな。おん者^{しゃ}らカフエーの女^{ボーイ}給や。お父さんに酌せエよ。」

権右衛門は泪を流さんばかりに上機嫌だ。今年から元旦には訪
問客に酒を出すことになり、「まあ、一つやつとくはなはれ」と朝
から客の相手をして来たので、大分廻っているのである。

「まあ、いやなお父さん」

振袖の中に顔を埋めたのを見て政江は権右衛門の下品な言葉使

いをたしなめねばならぬと思った。娘たちの縁談の手前もある。一座している者が内輪の者ばかりでよかつたものがこれが若し……が、今は黙っていることにした。一度だけだが、酔うている権右衛門に抗つてひどい目に会つた経験がある。

「おん者^{しゃ}ら、一ちよう浪花節掛けエ！ 虎造の森の石松やぜ。虎造はよう読みよる。何ん^なしよ、彼は声^{てき}が良えさかいな」

大阪弁に紀州弁がまじっている。言葉も内容も娘たちの氣にいらぬ筈がない。浪花節なんか下品やわと内心皆思う。代弁者はいつも信子だ。十七歳、眼鏡を掛けている。かね／＼「眼鏡は高慢たれや」と定評があるのだ。高慢たれの所以を今も發揮しないでおかれようか。

「私^{うち}はリストのハンガリアンラプソディ掛けようと思つてんのよ。
浪花節なんか下品やわ」

大阪弁と東京弁。

「さあ、掛けて来ようつと」信子が立上つたのを機会^{しお}に、姉妹は
ぞろ／＼と部屋を出て行つた。政江は千満子の帯を直してやつた。
「何んや、高慢たれやがつて！ あんなピアノ^ななんか何良えんな
ら！ ピン／＼、ポロン／＼大体政江！ おん者^{しゃ}があんなもん習
わせるのがいかへんのや！」

政江を除き、人々は総て同感であつた。政江は一寸ふくれた。

人々は酒の味がよくなつたと思ふのだった。市治郎夫婦、伝三郎
夫婦、三亀雄、もと雇人であつた春松が一座していたが、就中春

松は一番酒がうまいと思った。彼は政江に押しつけられて、兒子家の女中を嫁にしたが、その嫁が何かにつけて政江の指図をうけて威張り散らすので、亭主の威光が少しもないという理由で、政江を恨んでいるのだった。外にも恨む理由はある。が目下は専らそれだ。その嫁が今臨月で今日は来ていないということも酒の味に關係がある。三亀雄の妻は先刻一寸顔を出したゞけで、乳飲児があるというのを口実にさっさと引き上げていた。この事は一寸政江の機嫌を損じた。かね／＼三亀雄の妻が良家えうとこの出であるという理由からか頭が高いということに政江は不満を感じているのだった。が、三亀雄の妻は良家の娘ではあるが、実は養女であつて、本当は誰の、どこの馬の骨の子か分らぬ私生児なのだ、と

いう噂を耳にした時、だから政江は喜びの余りひどくそわ／＼したものである。

「そうは兄やんの云う通りにも行かんがな、この節は矢つ張り何んやナ、ピアノの一つ位は習わさんことにや……」

と言つたものがある。三亀雄だ。政江の機嫌をとる事に敏感なのだ。三亀雄の声は普段もそうだが、殊にこういう場合、いわゆる含み声で、黄色いという形容詞が適わしい。蓄膿をわずらつたことがある。夢々感じの良い声とはいえなかったが、このときの政江の耳には大変快かった。三亀雄の妻の早引けは帳消しになった。

「謹聴々々」

伝三郎の妻だ。権右衛門の浪花節が始つたので――。

伝三郎の妻は瘦形でどこか影の薄い感じのする顔立ちだが、どちらかといえば陽気好きである。昔流行った小唄を口ずさむ外は、余りパツとしないがのつぺりとした美男子の活動俳優の写真プロマイドを集めるのが唯一の趣味である。その癖活動には行つたこともない。伝三郎がやらさないのだ。先頃伝三郎の家で女中を雇つたが、直ぐ暇をとつた。彼女の様な働き者の主婦の下ではかえつて居辛いのだ。女中は暇をとる時、こゝの奥さんは何が楽しみで生きているのかと泣いた。伝三郎が極道者で彼女は十五年間泣かされて来た。そんなこと権右衛門は知らない訳でなかったが、未だ一度も面と向つて慰めもしなかった。かね／＼氣にしているのだ。

権右衛門は伝三郎に金を貸す時、お前に貸すのでない、お初つあんに貸すのだといつもいう。初乃という名である。権右衛門はいわば初乃に眼を掛けてやっているのだ。初乃が居なければ伝三郎の家は目茶苦茶だと権右衛門は常にいつてるのだが、之は大体当っている。

今も、権右衛門は、初乃の、右肩をぐいと下げて謹聴している姿を見ると、伝三郎奴とふと思うのだ。

「宜ろしおまんなあ。嫂さん」

伝三郎の妻は傍の市治郎の妻にそういった。ぽかんとしていた市治郎の妻は、あわてゝお国訛りで、

「はあ、ほんまにそうのし。良えのし」といい、まるで伝三郎の

妻に謝っているかの様にぺこりと頭を下げた。この女は大変いんぎんな態度の女である。この女が挨拶をする時の時間の永さと馬鹿丁寧さにはいつも伝三郎の妻は困るのである。が、伝三郎の妻もその都度、相手に負けぬ程丁寧に挨拶するのだった。今も、伝三郎の妻は何ということもなしにぺこりと頭を下げねばならなかった。市治郎の妻が両手を膝の上に重ね直すのを見ると、伝三郎の妻は襟元を直し、裾をひっぱって威儀を正す。この女達はいわばお互いのエチケットに夢中で、権右衛門の浪花節は碌にきかなかった。が、終って、一番先きに拍手したのはこの二人だった。

拍手されて権右衛門は照れた。

「いやあ。こらえらい恥さらしやな」

そう言つて頭のとつぺんをかく権右衛門の姿は仲々愛嬌がある。三十六歳で始めて一万円貯めた時に生やした口髭は彼の威厳に非常に関係あるものだが、この時はむしろ好色的にすら見えた。

「三味線しやみが無いでな。さつぱりどうも」ふと思いついた様に、

「どや、皆みなで一丁散財に行こら。お初はつつあん。お前も一緒に来いな」

「へえく。お伴さしてもらいまつせ」

いうだけは云つたが、初はつ乃は、権右衛門は大変酔つて居ると思つた。人々は顔見合せた。

「おやつさん。本ほん当まだつかいな」

今晚女郎買いに行く事に決めていた春松はその事を一寸念頭に

おいていった。女郎買いに就て権右衛門に一つの逸話があるのを春松は想い出した。——大分以前のことだが、権右衛門、伝三郎、三亀雄、春松の四人が商用で東京へ出掛けたことがある。東京の商人を軽蔑している彼等は従つて銀座へも行かなかつた。東京の商人とは、権右衛門一流の意見によると、——東京の工場で作つた例えば機械なら機械を彼等は東京で買う事が出来ない。機械は全部大阪の商人の手を経なければ彼等の手にはいらぬのだ。東京の工場から大阪の商人へ、大阪の商人から東京の商人へ、その間には沢山の運賃と口銭が機械に掛かる。何故こうなるかといへば、東京の商人は目下三つの需要があれば三つだけ工場に注文するが、大阪の商人は三つの需要しかないのに十の注文をする。工場が製

作品を全部大阪の商人に売りつける所以だ。東京の商人は向う先が見えない。——というのである。又銀座の商売人は殆んど資本を大阪の商人に借りてゐるではないか。で、彼等は銀座へも行かなかつた。が夜になると、伝三郎、三亀雄、春松の三人が、「さあ、之から東京の芸者を抱きに行こいら」と権右衛門を誘つた。

「わしは宿で寝てる」三人は出掛けた。翌朝彼等が千束町から歸つてみると、権右衛門は居なかつた。女中に聞くと、昨夜三人が出掛けた後でこつそり外出されましたとのことで、てつきり吉原か玉の井辺りへ出掛けたのだらうと推測された。果して、権右衛門は眠そうな照れ臭そうな顔で歸つて来た。皆んなと一緒に行けば権右衛門が勘定を払わねばならぬ、それを嫌つてこそくと一

人で安女郎を買いに行つたのであろうと、三人の意見だつた。

就中伝三郎はこの意見を強調した。というのはその頃こんなことがあつた。伝三郎が権右衛門から借りた九百円の金をいつまでも返済せず、うやむやにしていた。権右衛門は伝三郎が近頃七百円もする土佐犬を飼い、おまけに闘犬に勝つたといつては犬の鎖や土俵入りの横綱に大枚の金を使つてるときいて業を煮やし、内容証明書を伝三郎に送つた。伝三郎は蒼くなつて、電話の名義を他人名義にしたりして権右衛門の差押えにそなえた。

ある日、権右衛門は高利貸の如き折匏をもつて伝三郎の家へやつて来た。丁度伝三郎は人眼に立つ所、即ち家の前で土佐犬の身体を洗つてやつていた。「馬鹿奴が！」権右衛門はバケツを蹴り

倒した。愛犬は権右衛門にかみつこうとした。権右衛門は犬の吠声を後に逃げて歸つた。あとで、伝三郎は無理矢理に九百円ながしの金を払わされた。そんなことがあつたのだ。が、伝三郎は今はその意見を撤回している。あれは権右衛門が身を以て贅沢するなど教えてくれたのであると思う様になっているのだ。近頃彼は何かにつけて権右衛門の処世術を見習わねばならぬと思つている。漸く二万円の貯金が出来たので、急に浪費癖が収り銀行利子の勘定が何より面白くなつて来ているのだ。

——さて、春松は、

「おやつさん、ほんま本当でつか」

といつて、まさかとは思ひながら、ひよつと権右衛門が破目を

外して芸者遊びをするところを見たらどんなに痛快だろうと期待した。鼻たれ小僧の時から使われて、権右衛門おやっさんのためには随分危い橋も渡つて来た春松なのだ。権右衛門のことを想う念は一番強いともいえる。それだけに権右衛門の裸を見たがるのだった。が、彼の期待は次の権右衛門の一言で簡単に裏切られた。

「正月は芸妓げいこの花代が倍や。祝儀もいる」以下云々。

伝三郎が呑み過ぎて胸が苦しいといったので、初乃は塩水を取りに行つた。この家の台所の勝手は詳しい。時々手伝わされたことがあるのだ。台所にナマコの置いてあるのが眼についた。初乃は、みんなが先刻から数の子ばかりを酒の肴にしていたのをちらと想い出したので、ナマコの三杯酢をこしらえたら喜ぶだろうと

思つた。伝三郎にのますべき塩水のことが一寸忘れられた。――

「良え物がおました」

ナマコの皿を持って部屋に戻ると、伝三郎が、

「何をさらしてた、今迄。廻しの女郎おやまみたいに出て行ったら一寸やそこらで歸つて来ん」

「……………」

弁解しようと思つたが初乃は止した。伝三郎は少し耳が遠いので、納得させるには大声を出さねばならぬ。叱られて大声でもない訳だ。

「後家の婆みたいにこせく出しやばんな。大体、おん者しやは――」
胸が苦しくなつたので、伝三郎は小言こごとは後廻しにして反吐を吐

きに便所に立った。初乃がペタ／＼後に随いて行つた。

ピアノの音がしている。政江は、音で千満子だと分つた。眼を細めた。伯爵家との縁談もそろ／＼本調子に成りかけている。正月というものは何となく良いものだと思つた。ふと、千恵造の事が頭に浮んだ。伝三郎夫婦が部屋に戻つて来たのを機会しに政江は切り出した。

「ほんまに、何でんな、こないして、兄弟が集つてお正月するいうのは良いもんでんな」

「そうやのし。何が良えちゆうたかてのし。兄弟が仲良うお酒のでんでお正月出来けるちゆうのが一番良えいのし」

市治郎の妻が一つ／＼のしに力をいれていった。初乃もほゞ同

様の事をいった。男たちもそれ／＼短い言葉でそれに賛意を表し、酒をのんだ。政江の順番だ。

「之で、朝鮮にいる千恵さんさえ居てくれたら皆揃うた言うことになりまんのにナ」

権右衛門の盃に酒をつぎ、こぼれたのを拭布でふきながら、さり気なく言った。

「それを言いなはんナ」

反響の無い筈はないのだ。政江は花道より本舞台にさし掛ったという可きだ。

「いゝえ。言わしてもらいまつせ。私は何も義理の弟さんの悪口なんにいいたいことはソラおまへん。おまへんけどでんな。現在血を分

けた姪の……」あとは聞く迄もないことである。現在血を分けた姪の結婚の邪魔を千恵造がしている。尤もだ。が、聞いていて権右衛門は何かぐいと瘡にさわつて来た。——正月早々持ち出す可き話ではない。一体に、この前の縁談はとも角、今度の伯爵家との縁談は気にそぐわぬ。釣り合わぬというのでない。伯爵が何であらう。千恵造のこと位で破談にする様な権式など、ありがたくも怖くもないし、性にも合わぬ。商売人の娘は商売人に貰つてもらえばいゝのだ。いつそ厚子あつしを着た商売人に娘をやれとそう政江に言つてやろうか。あんたは娘の身になつて考えないと来るだらうな。が、商売人ほど良いものがあるうか。現に商売人なればこそ此のわしは百万円の金をこの腕で作つたのだ。——以上が、政

江の話をきいている時権右衛門が考えたことの概要である。考えることにより、権右衛門は怒りを押えていたのだ。政江にいつてやるべきいろ／＼な言葉を思い付くことによつて、辛うじて疳癰を押えていた訳である。殊に最後の「百万円」を考え付くことはこの際、大變効果的だった。

政江はくどく／＼と千恵造達の離婚の必要を説いた。が誰も返答らしいものを言わなかった。この人達は薄情だと政江は思った。彼女だけが娘のことを心配しているのである。娘程可愛いものがあるうか。政江は再び同じことを飽きもせず繰り返すのだ。熱心の余りいいすぎたと思つた彼女は、

「何も私は義弟さんのこと悪い^{わる}う積りやおまへん」

と最後に附け加えた。前後二回いわれたので、この言葉は権右衛門の注意を引いた。なるほど、千恵造は血を分けた弟であつたのだ。この想いは、他の弟たちの前であるだけに一層権右衛門の心を動かした。酒の勢いも手伝つて、権右衛門の声は乱暴に高くなつた。

「おん者らわしの兄弟のこと悪う抜かす権利がないわい。千恵造がいかな言うようなどこイ何も娘おなごをやらんでもえゝ。厚子を着た商売人なら千恵造とも珍宝とも、ギヤア〜いわんやろ。商売人にやったらいゝ。商売人ほど——」

以下、先刻考えた文句である。政江は後の方がもう耳にはいらなかつた。政江は娘のために泣いた。何という親であろう。夫の

ために泣いた。この人はこんな無茶をいう人ではなかった。が、彼女は自分の為に一層多く泣いた。権利という言葉がこたえたのだ。

「私に何で権利がおまへんです？」

泣き叫んだ姿を見て、人々は今後政江がヒステリーだといえる事を一寸喜んだ。

「まあく嫂さん」

「兄さん、あんたも」

仲裁する人はいずれも幸福な顔付きであつた。この母がこんなに憎まれていると知ったら娘たちは何と思うだろうか。娘たちにはその理由は分らぬだろう。が、理由は簡単だ。夫権右衛門を百

万長者にした内助の功績の上に余りにどっかりと腰を据え過ぎたからだ。権右衛門は金をつくるのが目的だったが、政江はその後のことが目的だった。男と女の野心の相違である。わけでも上品たる可き女がどっかりと座るなどとは、何れ人の眼によくは見えないのだ。

権右衛門は政江を撲った。ざつと十何年か振りである。春松などは微笑を禁じ得なかった。

「おん者らに何権利があるんなら、千恵造のことが気に喰わんなら、わしの弟のことが気に喰わんなら、さつさと出て行ってもらおう」

「あつ」という様、政江は身震いを始めた。彼女の様子は正視す

るに忍びないものがあつた。大袈裟にいうと、ウェーヴした髪の毛が更に大きく波打つた。こういう言葉に経験の多い伝三郎の妻は、こういう時政江がどんな態度を示すか見物である^{みもの}と固唾をのんだ。市治郎の妻は、政江を慰めるために今日一日を費す腹をきめた。男たちは、権右衛門の顔を頼もしげに見上げた。就中、市治郎、伝三郎、三亀雄にとっては、問題は自分らの弟の事である。兄弟愛の発露を控目にしてよいということはないのだ。春松は、^{おやつさん}権右衛門なるかなと思つた。之まで権右衛門が政江の尻に敷かれていることを大変不満に思っていたのだ。尻に敷かれていればこそ金も出来るのだ、との処世術など彼の与り知らぬ所である。

政江は何ごとかを叫びながら部屋を出て行つた。やがて彼女が

娘達に言つてゐるらしい声が聞えて来た。

「皆んな、良う聞いとくれや。お母さんが今お父さんに如何どないいわれたか、聞いとくれ。お前達は皆女子おなごや。女子は嫁に行ったら弱いもんやぜ。お母さんが良え手本や。私は出て行け言われたよつて出て行きます。皆んなはお母さんと一緒に行くか、それとも此処に居るか。えゝ？ 如何どないする？」

伝三郎の妻はさすがに政江を賢明だと思つた。彼女は自分に子供の出来ぬのを今更ながら悲しく思つた。娘達は、返答の仕様がなかつたから、母親を連れてぞろ／＼部屋に戻つて来た。

その時、もう権右衛門の姿は部屋に見えない。さすがに娘の手前恥しかつたのか、家を飛び出して、憂鬱な散歩を始めていた。

残された人々はこの場を收拾しなければならぬ。さしずめ年長者の市治郎に先ず発言権が与えられた。が、彼は恐しく無口な人である。市治郎の妻はしきりに夫の脇腹の辺りを小突くのだが、彼は冥想に耽っていた。言うべき言葉を探しているのだ。齒がゆい程である。が、かつて彼の無口な性質が非常に珍重されたことがある。——五年許^{〔ばかり〕}以前のことだが、某官省の不用銅鉄品払下げの見積の時、市治郎が贈賄の嫌疑で拘引されたことがある。このことには権右衛門も三亀雄も関係無しとはいえなかった。否、この取引で最も儲けたのはこの二人であつたから、彼等は蒼くなつた。伝三郎の家に集り毎晩徹宵で協議をこらした。噂によれば、市治郎はひどい〇〇に掛けられているとのことだ。しかも彼には

いい逃れる術が無いでもなかった。二人の名を出せばよいのだ。彼等は市治郎の無口な性質と、もと荷車挽きをしていた彼の頑強な身体を唯一の頼みにした。市治郎は、自分には娘が一人しか無い、権右衛門には四人の娘があり、三亀雄には良家の出の嫁があると毎夜留置場で呟いていた。指が千切れてもと齒を喰いしばった。期待にそむかなかった訳である。刑を終え帰つて来た時、市治郎は権右衛門、三亀雄の顔を見るなり言つた。

「悪いことするなら、一人やぞ」無口者の雄弁とでもいう可きか。以後、二人は市治郎に頭が上がりぬのだ。——市治郎が哀れな政江の身の上に就て漸く意見が纏り掛けた時、しびれを切らした伝三郎が口をひらいた。……伝三郎の饒舌をこゝに写す必要がある

うか。彼の家庭では月に二三度出て行け騒ぎがある。一々気にして、いてはやり切れぬのか、嫁さんはその都度いたって平気な顔で、出て行けという彼の言葉を受け流す。「出て行け」と、いうのは、いわば男の口癖だ。現に彼の家では結婚して一月も経たぬ内に、最初の「出て行け」があつた。が、もうかれこれ十三年何とか何とか言いながら連れ添うている。結婚したのは、たしか伝三郎が二十七歳、初乃が十八歳。昔は女は早く結婚したものだ。十九が年廻り悪いので、十八で結婚したのだ、が、その頃は十七位で結婚したのがいくらかもある。そう言えば、彼には十六で既に女があつた。……果てしがなかつた。昔話が始つて、一座の空気が少し和いだ。が、政江の心は収らなかつた。伝三郎と権右衛門は違

う。彼の「出て行け」は彼女の記憶する限り、最初のものだ。権右衛門は伝三郎の様に出駄羅目をいう人ではない。……権右衛門の比類なき堅固な意志に就て政江は大いに喋った。人々は謹んできいた。が、喋りながら彼女は不安であつた。何れは戻つて来るにしても、権右衛門はどんな顔をして、どんな事を言うであろうか。再び出て行けというだろうか。何としたものであらう……。

日が暮れて、彼は歸つて来た。政江は出来るだけ、いわゆる「背を向ける態度」を示したが、しかし、権右衛門の眼尻に皺が寄っているのを見ては、さすがに、ほつとした気持を隠し得なかつた。権右衛門は上機嫌と思われる声で、「新世界の十錢屋へ行って来ちやんよ。十錢屋が一番良えわ^{いっち}」

十銭屋とは、入場料十銭の漫才小屋のことである。正月の物日もんび

で満員の客に押されて漫才をきゝながら時間を費していたとは、如何にもうなずける事だが、彼の機嫌の良さは些か意外だった。

所詮、人々には計り知れぬ権右衛門の心中だ。彼は、幕合いにラムネをのもうと思ひ、人ごみの中で背のびをして売子を呼んだ。

が、売子は仲々やつて来なかつた。「御免やつしや」と人ごみをかきわけて、売子の方に行こうとした途端に誰かの足を踏みつけた。「こら！ 氣イつけ！ よんぼり不注意者！」「えらい済んまへん」

「済まんて済む思てけつかんのか！」「へえ」権右衛門は五度も六度も頭を下げねばならなかつた。相手は、職人風の男で、その暮し振りを察するに、その日暮し以上を出ないと見えた。頭を下

げながら、権右衛門の頭に、百万円が想い浮ぶ様では、彼は只の人間だといわれても仕方がない。大袈裟にいつて、彼はその時、百万円を捨てる覚悟をした。以下はその時の決心を披瀝した言葉である。

——「皆聞いてくれ。わしは百万円を無いもんと思うた。例の一件をやることにした」

年の暮に、彼のところへ、長崎県五島沖合にある沈没汽船売り込みがあつた。引揚げ操作は難業で、悪く行けば投資金丸損とさされているのだ。それをやろうというのである。人々は膝を寄せた。「ラムネのみながら考えたこつちやが——」と権右衛門は、万一の場合を顧みてこの際兒子兄弟合資会社を設立しようといった。

後顧の憂いがあつては一か八かの勝負は出来ぬ。それに、毛利元就の教訓。

「千恵造も仲間にしてやれ」

この一言は、政江の口元をほころばせた。千恵造を内地に呼び戻すには、無論賀来子離縁のことが交換条件になる筈との言外の意味を読んだからである。序に、政江の方の離縁は沙汰止みになった。彼女はこゝを先途と喋り立て、「万が一のこともおまつさかい……」権右衛門名儀の預金中、十五万円を政江、十万円を千満子名儀にして置くことの有利さを権右衛門に納得させた。先程の「出て行け」騒ぎが想いつかせた、之はいわば彼女の身分保証令である。その雄弁の間に、然る可き人が千恵造を迎えに渡鮮す

る必要ありと附け加えることも忘れなかった。

その夜、政江は権右衛門に寝酒を出し、その中へ久振りに媚薬を混入した。市治郎は妻と別れて、「芝居裏」で泊った。春松は「芝居裏」は好かぬといつて、飛田の遊廓へ行つた。伝三郎は自宅で博奕をした。連中に出す酒肴の世話で、伝三郎の妻は徹宵し、時々居眠りをして負けた伝三郎に叱られた。三亀雄もその博奕に加つていたが、途中で勝逃げし、道頓堀のグランドカフェーに出掛けた。そのナンバーワンのメリーという女を彼は月六十円で世話しているのだつた。メリーは仲々いゝ体を持つてゐるが、狡い。屢々病氣の口実を以て、彼を避ける、のは未だ我慢出来るとして、

（何故なら彼女も全然男嫌いではないのだから——）時々約束の手渡し以外にせびるのだ。この暮にも、姫路にいる母親が病気で見舞いに行くから、旅費にと四十円無心された。値切つて二十五円持たしてやったが、その後会っていない。正月だから帰っている筈だと、カフェーに出掛けたのだ。が、居ない。朋輩のいうところでは、

「見合いに姫路に帰らはつたいうことやわ」

見舞いと見合いと何んぼう違いくさるか三亀雄は腹立つた。博奕で二百円もうけたことを想い出して一寸心が慰なぐさめた。兒子家の娘達は、安らかに寝た。寝る前に、皆、オリーブ油を顔につけた。ニキビの出ている寿子だけは、アストリンゼントをつけた。

三

その元旦の夜、権右衛門夫婦はいつ迄も眼覚めていた。

権右衛門が便所に立つと、政江はその後に随き従い、権右衛門の手に手洗水を掛けた。月が凍っている様に白かった。

「こら、どうも。大きに、御苦勞はん」

権右衛門は内心照れて言つたが、彼の言葉は照れてる様には聞えぬ。政江にとって頼もしい所以である。手洗水を掛けるために便所の外で待っているなぞ、ついぞした事がなかった。婦人雑誌で学んだことである。その応用が、この様に自然に運ぶことは、彼女の趣味に適っているのだ。意識的に示す媚態で赧くなったり

するのは自他ともに嫌いである。また、助産婦見習時代から今日まで左様なことはなかった。権右衛門が又、彼女の媚態にはかむ様な人でない。いわば堂々とそれを受ける、その態度も政江の心に適っている。例えば新婚初夜に於ける権右衛門の態度だ。床入りの盃が済んだ後、権右衛門は嚴然として、言った。

「わしの様な者の所へ縁あつてとはいいいながら、よく来て呉れた。いま、わしは六百円しか財産がない。わしは、どうしても十萬円の金を作つてみせる。その為には、どんな苦勞もいとわぬし、また贅沢もせぬ積りだ。わしには四人の弟と二人の妹がある。一家の兄としてわしはこの目的を抱いた。お前もこのわしの目的をよくのみこんで、どうか、わしが目的を遂げられる様氣張きばつてくれ」

その時彼女は両手をついて、

「よく言ってくれました。どうか、あなたはその目的を遂げて、立派に男として成功して下さい。私も兒子家に來たからは、及ばずながら兒子家の家長としてのあなたの目的をお助けいたします」といったと、その後、屢々義妹たちに話した。無論、これはその時の二人の言葉通りではない。が、人々に話すにはこの様にいわば文章化さす方が少くとも政江には好ましい。

だから、今も、政江が、部屋に戻り権右衛門と並んで寝ながら、ふとその時のことを回想した時、頭に浮ぶのは、この文章化した言葉であつて、決してごたくした紀州訛のある方ではなかった。

「十万円貯めてから後百万円出来るまでより、六百円の花から十

万円こしらえる迄が苦勞やった」とその後、屢々政江が人に語るその十万円貯める迄の苦心を彼女は回想した。ふと、権右衛門を見ると、彼も何か回想に耽つてゐる様だつた。想いは同じだと政江は何か愉しい氣持で、炬〔こたつ〕燵の上に足を伸ばした。その為には、権右衛門の足に触れる必要があつた。

権右衛門はしかし、往時を回想してゐるとはいえ、政江と同じ六百元から十万円貯めるまでの径路ではなく、無一文から六百元作るまでの、いつてみれば、政江と結婚する迄のことを回想してゐたのだ。政江の足が触れた時、彼は、こともあろうに、若い日の恋人の事を考えていたのである。花子のことだ。

道頓堀、太佐衛門橋の橋上であつた。その日は、父の歿後、和歌山県湯浅村の故郷を後に、きようだい散り／＼に自活の道を求めて上阪してから丁度十日目だつた。職を探すべく千日前の安宿に泊っている内に、所持金を費い果して、その日は朝から何もたべていない。道頓堀川の泥水に川添いの青楼の灯が漸く映る黄昏時のわびしさを頼りなく腹に感じて、ぼんやり橋に凭れかゝつて「もた」いると、柔く肩をたゝいた者がある。振りかえつて、アツ！ 咄嗟に逃げようとした。逃げるんかのし、あんたは。紀州訛だが、いや、そのために一層妙になまめいて、忘れもせぬ、それは十日前故郷を出る時お互い別れを告げるのに随分手間の掛つた居酒屋の花子だ。（現在その女の本当の名を忘れているのだが、想い出

す都度簡単に花子だとしている）あの時、一緒に連れてくれいたのに、のし、どない思て連れてくれなかつちやんならと、彼女は並んで歩き出すと、言つた。後を追うて大阪に來た、探すのに苦勞した、今はこの辺りの料亭にいる。誘惑が多いが、あんたに實をつくして、身固くしている。収入みりがかなりあるから、二人で暮せぬことはない。あんたが働かんでもよい、私が養つてあげる。——ふん／＼と聞いていたが、急にパツと駆け出した。道頓堀〔ざつと〕の雑 間をおしのけ、戎橋を渡り、心齋橋筋の方を走つた。今の自分に女は助け舟だが土左衛門みたいに助けてもらつて男が立とうか。土左衛門なら浮びもするが、俺は一生浮び上れなくなるのだ。権さん／＼とよぶ花子の声に未練を感じたが、俺は十万

円作るのだと、スリの様に未練を切つて、雑闇の中を逃げた。

（これらの表現は、権右衛門が屢々人に話す時の表現による）その夜、無料宿泊所のない時代（大正元年）のこと故、天王寺公園のベンチで、太左衛門橋で会った花子のことを悲しく想い出しながら一夜を明し、夜が明けると、川口の沖仲仕に雇われた。紀州沖はどこかと海の彼方をじつと見つめては齒をくいしばり、黙々として骨身惜しまず働いている姿を変つてると思つたか、主人が訊ねて、もとは魚問屋の坊^{ぼん}ぼんであると分ると、可哀想だと、帳場に使つてくれた。お前^まはんは帳面付けする様な人ではないという定評が与えられた。如何にも、自分はこんな事をする気はない。月々定まった安月給に甘んでいて出世の見込みがあるうか、商^{あきな}

売^いをするんだと、暇をとった。

一月分の給料十円を資本に冷やしあめの露店商人となった。下寺町の坂の真中に台車を出し、エー冷やこうて甘い一杯五厘！

と不気味な声でどなった。最初の一日は寄つて来た客が百十三人中で二杯三杯のんだ客もあつて、正味一円二十銭の売上げで日が暮れ、一升ばかり品物が残つて夏のことに腐敗した。氷三貫目代の損であつた。翌日から夜店にも出て、三十銭の儲^{もうけ}がある様になつた。十日程経つた頃だつたらうか、千日前のお午^{うま}の夜店で、

夜店外れの薄暗い場所に、しかもカーバイト代を節約した一層薄暗い店を張っていると、おっさん一杯くれと若い男が前に立つた。聞き覚えのある疇高いかすれ声に、おやつと、暗がりにすかして

見ると、果して、弟の伝三郎であつた。赤ん坊の時鼻が高くなる様にと父親が暇さえあれば鼻梁をつまみあげていたので、目立つて節が高くなっている伝三郎の鼻の辺りをなつかしげに見た。伝三郎も兄と知つて、兄^{にい}やんと二十二の年に似合^{にあ}わぬ心細い声をあげて、眼に泪を浮べた。聞いてみると大阪へ来ると直ぐ板屋橋の寿司屋の出前持ちになつたが、耳が遠くて注文先からの電話がよく聞きとれぬから商売の邪魔だと、今朝暇を出され、一日中千日前、新世界界隈の口入屋を覗きまわつて板場の口を探していたが見つからず、途方に暮れていたところだという。話している内に道頓堀の芝居小屋のハネになり、丁度そこは朝日座の楽屋裏の前だったもの故、七八人一時に客が寄つて来たのを機^し会^おに、暫く客

の絶間がなかった。伝三郎もほかんともしていられず、おっさん一杯といわれると、低声こごえでヘイと返事し、兄の手つきを見習つて、コップにあめを盛った。

翌日から、二人で店を張る様になった。儲けが少いし、二人掛りでする程でもない、冷やしあめの車、道具を売り払った金で、夏向きの扇子を松屋町筋の間屋から仕入れ、それを並べて店を張ることにした。品物がら、若い女の客が少からず、殊に溝ノ川、お午うまなど色町近くの夜店では、十六歳から女を追いかけた見栄坊のこと故伝三郎は顔がさすとて、恥しがり、明らかに夜店出しを嫌う風であつた、のをたしなめて、板場なんか雇われて人に頭の上らぬことするより、よしんば夜店出しにせよ自分の腕一本で

ひとりあきない

独立商をする方が何んぼううましか、人間人に使われる様な根性で出世出来るかと、いいきかせた。持論である。

半月も経った頃だったろうか、確か上塩町の一六の夜店の時だった。人の出盛る頃に運悪い夕立が来て、売物の扇子を濡らしてはと慌てゝしまいこみ、大風呂敷を背負ったまゝあるしもたやの軒先に雨宿りした、が、何の因果かそこは妹のまつ枝が女中奉公している家だった。どうしてそうと知ったのか今は忘れた。がとにかく、何ヶ月振りかのまつ枝の顔をみた記憶はある。立ち話、という程でもないが、二言三言口もきいたであろうか。まつ枝の弟にあたる伝三郎が、「姉やん、えらい良えとこに居ちやるんやのう」と言った言葉に記憶がある。かなり立派な構えのしもたや

であつたに違いない。そのとき、まつ枝の顔に困惑に似た表情が浮んだのを見逃さなかつた。が、それよりも、こちらの方が困惑していた。夜店出しの兄弟をもつてると知れば、まつ枝も我が主人に肩身も狭まかろう、夜店出しなどするものではない。——俄か雨に祟られたみじめな想いも手伝つて、しんみりと考えた。

間もなく夜店出しを止めることにした。その時の想いが直接の原因だつた。もう一つには、同業の者を観察して、つく／＼嫌気がさしていた。鯛焼饅頭屋は二十年、鯛焼を焼いている。一銭天婦羅屋は十五年、牛蒡、蓮根、コンニャクの天婦羅を揚げている。鯛焼が自分か、自分が鯛焼か、天婦羅が自分か自分が天婦羅か、火種や油の加減をみるのに魂が乗り移つてしまう程の根気の

よさよりも、左様に一生うだつの上りそうにもない彼等の不甲斐無さが先ず眼につくのだった。八月の下旬だった。夏ものゝ扇子がもう売れる筈もなかった。売れ残りの扇子を問屋にかえしに行くと、季節も変ったし、日めくり^{カレンダー}をやつてはとすゝめられたが、断った。「では、新案コンロは如何^{どない}だす。弁さえ立てば良え儲けになる」断った。「人間、見切りがかんじんです。あかんと思うたらすっぱり足を洗うのがわしの……」持論にもとづいたのだ。

伝三郎と二人で借りていた玉造のうどん屋の二階をひき払って、一泊二十銭の千日前の安宿に移った。うどん屋の二階に居れば、階下の商売が商売故、たまには親子丼、ならいゝが酒もとる。借りの利くのを良いことにして量を過すのがいけないと思つたのだ。

現にそこを引き払う時、払った金が所持金の大半で、残ったのは回漕店を止める時貰った十円にも足らぬ金だった。二人の口を糊して来たとはいえ、結局、冷やしあめ屋と扇子屋をやっただけ無駄となった訳だ。伝三郎はこれを機会に、生国魂前町の寿司屋へ住込みで雇われたので、料理衣と高下駄を買えと三円ばかり持たしてやった。それで所持金は五円なにがしとなった。

伝三郎を寿司屋へ送って行つた帰り、寺町の無量寺の前を通ると、門の入口に二列に人が並んでいた。ひよいと中を覗くとその列がずっと本堂まで続いている。葬式らしい飾物もなし、説教だらうか、何にしても沢山の「仁を寄せた」ものだ、きいてみると、今日は灸の日だという。二、三、四、六、七、の日は灸の日

で、その日は無量寺の書き入れ日だつせとのことだった。途端に想い出したものがある。同じ宿にごろ／＼している婆さんのことだ。どこで嗅ぎつけて来るのか、今日はどこそで何んな博奕があるかちゃんと知っているらしく、毎日出掛ける。一度誘われて断つたが、その時何かの拍子に、婆さんはもと灸婆やいとであつたときいた。それを想い出したのだ。宿に帰ると早速婆さんを掴まえて、物は相談だが、実は、おまはんを見込んで頼みがある。――

翌朝、二人で河内の狭山に出掛けた。お寺に掛け合つて断わられたので、商人宿の一番広い部屋を二つ借りうけ、襖を外しぶつ通して会場に使うことにした。それから「仁寄せ」に掛つた。村の到るところに、「日本一の名霊灸！ 人助け、どんな病もお

して見せる。○○旅館にて奉仕する！」と張り出しをし、散髪屋、雜貨屋など人の集るところの家族にはあらかじめ無料で灸をすえてやり、仁の集まるのを待った。宣伝が利いたのか、面白いほど流行った。婆さんは便所に立つ暇もないとこぼしたので、儲けの分配が四分六の約束だったのを五分々々の山分けにしてやった。狭山で四日過し、こんな目のまわる様な仕事はかなわん、元手が出来たから博奕をしに大阪に帰りたいという婆さんを拝み倒して、紀州湯崎温泉に行った。温泉場のこと故病人も多く、流行りそうな気はいが見えたので、一回二十錢を三十錢に値上げしたが、それでも結構人が来た。前後一週間の間に、五円の資本が山分けしもとでて八倍になり、もうこの婆さんさえしつかり掴えて居れば一儲け

出来ると、腰が抜けそうにだるいという婆さんの足腰を温泉で揉んでやったり、晩には酒の一本も振舞ってやったりして丁重に扱っていたが、湯崎へ来てから丁度五日目、ほんまに腰が抜けたと寝こんでしまった。按摩をやとったが、按摩の手では負えず、医者に見せると、神経痛だ。ゆつくり温泉に浸って養生するがよろうとのことだった。まる三日婆さんの看病で日を費したが、実は到頭中風になった婆さんの腰が立ち直りそうにもなかった。宿や医者への支払いも嵩んで来て、下手すると無一文になるおそれがあると、遂に婆さんを置き逃げすることに決めた。人間見切りが肝腎。――

——が、今も、いやな事ながらその婆さんの顔が彷彿として浮んで来る。小柄で常に首をかしげている、それだけなら往々にして可憐に見える恰好なのだが、この女の場合、顎がしゃくつて突き出ているから、いつそ小憎い。それだけに同情の念が薄らぐのだが、その代り、祟りというものがあるなら、こういう婆さんこそ一層恐ろしいのだ。何れにしても寢覚めの良いものではない。というのは、いってみれば、この婆さんを踏台にして、以後トン／＼拍子に浮び上って行つたからだ。——

湯崎から田辺に渡り、そこから汽船で大阪へ舞い戻つた。船の中で芸者三人連れて大尽振っている中年の男を見つけ、失礼です

が、あんさんは何御商売したはりますのですか、ときくと、男は哄笑一番、やがて、連れの芸者にはぐかるのか低声で、もと紙屑屋しとつたが、今はこないに出世しましてん。大阪に戻ると、早速紙屑屋をはじめた。

所持金三十円の内、六円家賃、敷金三ツの平屋を日本橋五丁目に借りた。請^{うけはん}印は、伝三郎が働いている寿司屋の主人に頼んだ。日本橋五丁目の附近には、五会^{ごかい}という古物露天商人の集団があり、何かにつけて便利だった。新米の間は、古新聞、ボロ布の類を専門にしていたので、ぼろい儲けもなかったが、その代り、損もなかった。馴れて来るとつい掘出物をとの慾も出て、そんな時は五会の連中に嗤われた。はじめてから三月程経ち、切れた電球千個

を一個一錢の十円で電灯会社から買取り、五会の古電球屋に持つて行くと、兒子はん、あんたは商い下手や。廃球は一個二厘が相場やというのである。古川という電球屋はしかし、暫く廃球を調べてから、おまはんの事やから、まあ一錢で買うたげる、といつてくれた。二厘の相場のを一錢とはと不審に思い、その後、用事のある無しにつけて、古川の店に出入りしている内に、分つた。廃球の中に、「ヒツツキ」というのがある。線が全然切れてしまわず、片一方外れているだけで、加減すると、巧く、外れた場所にヒツツクのである。灯をいれると熱で密着し、少くとも四五日は保つ^も。それを新品として安く売なのだ。「白金つき」というのがある。電球の中には少量だが白金を使用しているのがある。

つぶして、ガラスと口金の真鍮をとったあと、白金を分離するのだ。白金は一匁^{〔もんめ〕}二十六円で、一万個から多くて二匁八分見当とれる。「市電もの」というのがある。市電のマークのある廃球のことで、需要家は多く市電から電球を借りているのだが、切れれば無料で引き換えてくれるけれど、割れれば一個五十銭弁償しなければならぬ。その時に、たとえば古川の店で「市電もの」の切れたのを一個十銭で買って、それを電灯会社で新品と引換えてもらうとすれば、差引き四十銭得をすることになる。買ったといわんといとくれやすやという言を守ればいゝ訳である。「ヒツツキ」「白金もの」「市電もの」の多くまじっている廃球ならば、だから一個一銭の割でも結構儲る訳だ。――

と、知つて、翌日から、廃球専門の屑屋となつた。大八車を挽いて、「廃球たまつてまへんか」と電灯会社や工場を廻つた。一個三厘で買い「ヒツツキ」と「市電もの」は古川に一個五銭で売り、「白金もの」は自宅で分解することにした。分解の方法を古川が容易に教えぬので、一夜芝居裏の遊廓で転ころび芸者を抱かせてやる必要があつた。その時、附合いに放蕩したが、想えば女の肌に触れるのは一年半振りのことだ。どんな芸者だったか、たしかに印象浅からぬものがあつたが忘れてしまった。それより、古川の抱いた芸者の顔に記憶がある。花子に似ていたからだ。酔つぱらつた古川が、尻をまくりふんどしを外して、乱舞しながらその妓に悪戯するのを、見るに忍びぬと辛い氣持だった。商談が大切

だと、辛抱して調子を合わせていたものの。

その後、古川が故買の嫌疑で拘引されたときいて、その時の溜飲が下がった。が、旬日を出でずして、自分にも呼び出しがあった。古川の「市電もの」売買に関係してゝはななろうかと蒼くなつた。溜飲が下るところではない、こつちも危いのだと、女のことに拘泥つていゝ氣になつていた自分の甘さを固くいましめた。

警察の呼び出しは、しかし、自転車の鑑札並に税金のことだった。〔ならび〕

ほつとし、以後、税金は収めることにした。自転車はその頃雇つた春松の使うものであった。屑屋をはじめから一年足らずで、もう雇人を使う身分になつた。現金と、品物を合わせて五百円近くの金があつた。煙草一本吸わなかつたのだ。十六の春松がませ

て、こつそり女郎買いに行くのを見ると、心そゝられぬこともなかつたが、女の肌ざわりよりも紙幣の肌ざわりの方がよかつた。一枚々々皺をのばして、胴巻きにしまっているものを、見すくあつという間の快樂のために失つてなるものか。春松は遊びが好きで困り者だつたが、その代り、白金分離の仕事はまことに鮮かだつた。先ずガラス棒を火で焼き、それを挽臼で挽き砕いて、粉にする。それを木製のゴマいりにいれ、たらいの水の中で静かに揺り動かすと、白金まじりの金属が残つて砂粉だけが水の中に逃げる。その手加減がむずかしいのだ。少し手元が狂えば大切な白金が逃げる。春松のゴマいりを揺り動かす手付きは、見ていて惚々するほどで、しかも逃げた砂粉を再び何度もくゴマいりにい

れて、いつてみれば、女が蚤のみを探す時の熱心さがあつた。尚、春松は炊事も上手であつた。鰯の煮物を作るにも、しそと土しようがをいれ、酢と醤油以外に水を使わず、些も生臭味の出ない様に煮るこつを心得ているといった風で、やもめ暮しに重宝であつた。が、ある日、春松は雨の土砂降りの中を廃球買いに出歩いたのが原因もとで、感冒を引き、肺炎になつた。三十九度五分の熱が三日も下らず、派出所看護婦を雇つた。二十二三の色黒い器量のよくない女であつた。が、何となく頼もしく、同じ家に寝泊りしているの
で自然情も移るのだ。何かの拍子に、裾が乱れて浅黒い脛がちらと見えた、それが切つ掛けで、口説いて、というより殆んど行動に訴えたら、脆かつた。政江であつた。間もなく結婚した。大正

三年の二月、たしか節分の夜で、雪だった。――

権右衛門のその夜の回想は、以上に止まらぬ。が、前述の通り既にこの結婚の時は六百円の金を貯めていたのであるから、一先ず、こゝで打ち切つてもよいだろう。以後は、政江の回想に待つ可きが順序だ。結婚式の夜の権右衛門夫妻の意義ある会話に就ては前に述べた。この夜の前後のことで、述ぶ可きことは多い。が、それは二人の果てしなき回想に任して置く方が賢明だ。こゝでは、結婚の費用に、権右衛門が七百円の金を費つたことを一言して置く。つまりその時彼は千三百円もっていたが、七百円結婚に費つて六百円（これは在庫品も勘定にいれて）残つたことになる訳で、

これは、一般の常識からいってもなか／＼思い切ったことである。彼にとつては暴挙にひとしいと一応考えられる。が、この七百円は前から所持していた金ではない。彼が、結婚に際し、いわば結婚記念にばた／＼と一儲けた金である。その必要があつたのだ。伝三郎の言を借りると、「結婚まえに、もうお祭りが済んでいた」訳だが、兒子家の家長が多少の金を節約したさに然るべき式典を経ずして結婚するなど、権右衛門の潔よしとせぬところだつたのだ。冠婚葬祭を軽んずる様で人間出世は出来ぬという信念をもっている。と、同時に、虎の子の貯金全部投げ出して立派な結婚式をあげたが、その時は無一文だったという様なことも、彼のとらざるところだ。だから、その際、結婚費用を一儲けせずんば止ま

なかつたのだ。

それには、危い橋を渡る覚悟があつた。その頃、小っぱけな電球の町工場をもっている松田という男に、口金代百円許り貸して、いて、抵当に電球三千個とつていた。百円の金が払えぬ丈あつて、松田は如何にも意久地ない男だつた。彼は、自分の姓が松田というところから、自分の製品にマツダ電球というマークをつけていたが、本物のマツダランプは一流品で、町工場の製品が一個十銭とすれば、少くとも一個三十銭の価値がある。だから、当然、マツダランプから松田に抗議があつた。それを、松田は突つ放せぬ、どころか、商標偽造で訴えられる心配までしているのだ。マツダとマークするからは最初から腹を繰くつていた筈なのに、所詮は、

金儲け出来ぬ男だと、権右衛門は松田をおどしたり、そゝのかし
たりした揚句、有金全部はたいて、松田の製品を殆んど買い占め
てしまった。名目は抵当物品ということにした。松田が訴訟を起
されて負け、マツダランプから製品を押えに来たが、権右衛門の
抵当物品故手を触れる訳に行かなかつた。困り抜いたマツダ側と
交渉した時の権右衛門の押しの強さには、松田もあきれてしまつ
た。結局、マツダ側は、マツダランプ並の値で買取らされてしま
つた。放つて置けば「マツダ電球」なる粗悪品が流布し、マツダ
の信用にかゝわるという弱味だ。その時の儲けの幾何かを口銭と
して松田に与えたその残り、即ち権右衛門の純利益が七百円だつ
たのだ。――

この話をきかされた時、政江が如何に権右衛門を頼もしく思つたかは、想像に難くないであろう。彼女は権右衛門に希望をかけた。婚礼の翌日、彼等が食べた昼食は、麦飯に塩鰯一匹であつた。大阪では節分の日に麦飯に塩鰯を食べるのが行事の一つと成つてゐる。婚礼の日は節分だったから、つまり一日延ばして売れ残りの安鰯で行事をすませた訳だ。が、この行事はその日のみに止らず、その後日課となつた。六百円から十万円貯めるまでの苦心中、彼女が誇つて良いのはこの一事である。最近伝三郎がこの行事を見習つてゐる。が、彼は鰯が好きだから、むしろ贅沢になる。季し節外ゆんれや走りの鰯をたべたがるからだ。政江の苦心とは少々違う

のである。もう一つ彼女が誇つて良いのは、その後、権右衛門の弟たちが兄のお蔭で商売が出来た様になった時、彼等に資本を貸すと、必ず目立たぬ程度に利子をとる様に権右衛門を強制したことである。目立たぬというのは、その利子の取り方が貸金の何分というのではなく、その貸金を資本に儲けた額の何分というのである。儲かる見込の無い時は無論貸さない。確実に、普通の利子より多くとれるのだ。三亀雄はいざ知らず、伝三郎など、見栄をはって儲けを誇張する癖があるから、随分損な勘定だと、時々伝三郎の妻はこぼしたものだ。誰でも人に好かれないものだから、こういう政江のやり方は、容易に実行出来るものではない。夫の義弟達の上前をはねて憎まれるのも皆夫の為を想うからだ、と堅く

腹をくくっていたなればこそではないか。

こういう政江を権右衛門は多としていた。権右衛門の偉さの一つは、「差出がましゅうございますが——」という政江の意見に抗わなかったことである。政江としても、やり易かった訳だ。

が、政江の回想では、この事がいちばん辛かった事として泛んで来る。夫と義弟達の間立つて随分泣く想いをしたというのである。所詮男は我儘故、女の苦心が分らぬ、蔭で泣いたことがどれ位あるかというのだ。少くとも、彼女はそう思っていた。だから、六百円から十万円作るまでの苦心の中、彼女が強調するのは常にこの一事だ。が、それだけで、如何にしても十万円は無理である。故に、彼女も無論、権右衛門の腕は認めている。「見切り

が肝腎」の鮮かさはこゝでも問題になる。

何時の間にか、彼は廃球屋を止めていた。「ヒツツキ」や「市電もの」は危険だし、「白金もの」もそろ／＼白金使用分量が少くなるだろうと逸早くにらんだからだ。案の条、間もなく、電球には白金に代るべき金属が使用されることになった。先見の明ともいう可きだ。もう一つの先見の明は、歐洲大戰が起つて、銅、鉄、真鍮などの金属類の相場が鰻上りするのを予想して、廃球買いのため出入していた電灯会社に頼んで古銅鉄線、不用レールや不用発電所機械類などを払下げてもらったことだ。最初会社側では相場が分らぬまゝに、二束三文で売り渡した。相場が分り出して来ると、用度課長に賄賂を使った。同業見積者が増えて来れば

「談合」の手を使った。市治郎、伝三郎、三亀雄などは、はじめこの「談合とり」で金を作っていたのだ。権右衛門の様に銅鉄売買をする甲斐性はなし、たゞ兄のおかげで入札名儀だけを貰って体裁だけの空入札をし、談合の口銭を貰っていたのだ。彼等がそれでたとえ一万円の金を作るにしても、権右衛門や政江が苦心してこしらえた百円の金の値打もないと、政江は思ふのだった。

が、政江は、春松の苦心を忘れてゐる。例えば春松の醜く押しつぶされている右の手の親指のことは、彼女の回想には泛んで来ない。——春松は、権右衛門が落札した銅鉄品の引取に出張する時には、常に同行した。落札品の看^{かん}貫^くの際、会社側の人の眼をかすめて、看貫台の鉄盤の下に鉄製の小さな玉を押しこむのが彼

の役目である。その装置をすれば、百貫目のものが六十貫にしか掛からぬのだ。ある時、監視人があやしんで、看貫台の上に乗つてみようとした。自分の体重なら、ごまかしは利かぬ筈だ。春松は慌てゝ、玉を抜こうとした。その途端に監視人が台の上のつたので、彼の手は挟まれてしまった。おまけに、続いて、三、四十貫の銅線が看貫台に積み上げられた。春松の顔はみるゝ真蒼になった。権右衛門はさり気ない顔で煙草を吸うていた。——このことを、春松は、いつか千恵造の前でいい出して、それが酒をのんでいる時だったので、泣上戸の彼は泣き出したことがある。泣いたのは、嫁のことを想い出したからだ。嫁は兒子家の女中をしていたのを、無理に押しつけられたのだ。その嫁が政江の威光

を笠にきることが、春松にとっては癪で仕方がないのだ。だから、ついで云い出したことの無い看貫のことを持ち出して、千恵造に訴えるのだ。「わいはこないに権右衛門おやっさんの為に泥棒の真似までして来たのや、それやなのに、あの主婦おかあは（政江のこと）……」

「それをいいな、それを」と千恵造はなだめたが、女のためにお人善しの春松がいうべからざる事迄いたくなる、その心事には同感出来るものがあつた。

大正五年、権右衛門は一万円出来た。口髭を生やしたのはこの年である。大正十年に十万円になった。以後、百万円に達するまでは容易であつた、と政江はいう。十万円貯めてからは、たとえば、昼食にはもう鰯だけというようなことはなかったのだ。その

頃漸く雇った女中の手前もあった。政江の兄はそれまで豆腐屋をしていたが、廃業して、気楽な煙草屋を始めることになった。妹は産婆をしていたが、これも廃業して、齒医者と結婚した。その時の祝いに、彼女は千円もするダイヤの指輪を贈った。その他、以後楽しい事ばかりである。……

……その夜、権右衛門夫婦は明け方まで眠らなかった。話すべきことも多かったし回想が次から次へと果てしなかったからである。

四

千恵造夫妻に子供の無かったことが、何より好都合だった。彼等は別れた。

兒子兄弟合資会社の一員に加えるという兄の志を多としたのだ。弟は感激の余り、賀来子を離縁した訳だ。政江の期待通りだったが、慾に目が眩んで離縁したというのは少し酷だ。少くとも、その決意を固めた瞬間の千恵造には、慾得の觀念に拘泥する余地はなかった。このことは、兒子家の使としては／＼朝鮮まで出掛けた船司船造がよく知っている。

千恵造は泪を流して船司にいったのだ。こんなにまで、兄が自分のことを思っていてくれたとは知らなかった。もはや、姪の結婚の邪魔をする気はない——と。船司はもと権右衛門等の出生地、

湯浅村の村長をしていた男だが、今は落ちぶれて、生命保険の勧誘員をしている。人に欺かれて、田地家屋までとられてしまったというだけあって、善良な性質の男に違いない。だから、その時の千恵造の涙を邪推する気づかいはない。涙を流している人間が慾得のことを考えている、などとはこの男の想像もつかぬことだ。普通、人は屢々慾得のことで涙を流すものだなどとは――。

衣食足らなければ、しかし、千恵造といえども、礼節を知る訳はない。が、そのことは、むしろ次の彼の言にあらわれたと見る可きだ。「賀来子は何の欠点もないのに一生棒に振るのや。如何^{どな}いする？」暗に手切れ金のことをほめかしたのだ。それ位は権右衛門も出してもよいだろう。千円の金が用意されていると、船

司は答えた。

賀来子はかねてこのことあるを予期していた。千満子の縁談の相手が伯爵家だときくと、彼女も心安らかに身が引けると思った。最近、男の子を貰い子して二人暮しが三人になり、賑やかになる筈だったと泣いたことは泣いた。何れは船司は困らぬ訳には行かぬ。承知の上だが話が纏つても船司は良い気はしなかった。

船司は、ハナシツイタ、ソウキンタノムと大阪の兒子家へ電報打った。実は、万一のことを慮つて、船司には手切金を持参させていなかったのだ。金が電送され、千恵造に渡そうとすると、受とらなかつた。自分が離婚するのではないから、自分の手から賀来子に渡す訳には行かぬ、というのだ。離婚するのは権右衛門だ、

権右衛門の代理の船司から渡すべきだという理窟は尤もだと、船司は思い、その様にした。こういう千恵造の態度はあるいは皮肉とも生意気とも見えるものだが、船司は、かえって、立派だと思ひ、何が社会主義者なもんかと感心した。むしろ、成功すれば五万円の保険に加入するという好餌につられて、このいわば生木を割く様な別れ話の立役者になった自分を恥じた。千恵造夫妻のみるからに仲睦じい容子を見るにつけ、この想いは一層強くなった。単に慾で動く人間だと見られたくない為に、船司は、出来得る限りの人情味を見せねばならぬと思うのだった。

こんな船司を兒子家では使として期待したのではない。船司は、ちかごろ、同郷の縁を頼りに、兒子家に勧誘に來た男だが、居留

守を使われると、「では、一寸新聞を拝借」と一枚の新聞紙を何時間もかゝって読み、「お帰り」を待つ、その根の良さと、押しの強さと、物に動じない態度を買われたのだ。もう一つは、船司は五十八歳で、もはや老人といつてもよく、だから情にからまされないという点でこういう話に好適だと、その年齢も買われているのだ。それ故、この様に人情味を發揮してくれるのは困るのだ。落ちぶれた者同志ではお互いに同情もある。そんな同情をむやみに出してくれては、一層困るのだ。が、とにかく、話は纏ったのだ。一月下旬のある夜、千恵造は内地へ帰って来た。伝三郎夫妻が大阪駅まで出迎えに行つた。

プラットホームに汽車がはいると、伝三郎は妻を叱りとばしな

がら、右往左往し、やつと車窓に、船司の顔を見つけた。船司は伝三郎の顔を見ると、如何にもつまらなさそうな表情をし、傍を指さした。千恵造の外に、賀来子の姿も見えたので、伝三郎は、あつと思ひ、久し振りに会う弟にいう可く準備して来た「よう帰つて来た」という言葉が出なかつた。賀来子が伝三郎の妻に挨拶している間、兄弟は、ぽかんと突つ立つたまゝ、それ／＼お互いの妙な顔を見守るばかりだった。いわば、伝三郎は狐につまゝれた形だ。伝三郎の言を借りると、「うちの女房が双子産かかあ ふたごみくさつた様な氣持がした」のだ。

が、事情を訊いてみて一応釈然とした。賀来子は、千恵造と別れるとなればもう朝鮮にいても必要も氣持もない、どうせ内地へ帰

るのだから、それならば同じく内地へ帰る千恵造と一緒に……と
思ったというのだ。せめて別れるなら、汽車の中だけでもゆつ
くり名残りを惜しみたいという賀来子の希望をどうして空しく出
来たろうかと、船司は弁解し、兒子家の人が出迎えなかったのが
もつけの倖いだ、無論このことは兒子家に内密にと、伝三郎に念
を押した。頼まれては、いやといえぬ性質だったから、伝三郎は
承諾した。それはよかったが、彼には、今こゝで思い掛けなく別
れの愁歎場を見なければならぬのが辛かった。別れを告げるのに
一時間も掛り、千恵造は一先ず伝三郎の家へ行つた。賀来子の行
先きに就ては、訊ねるべき筋合のものではなかった。船司は堅い
表情のまゝ、兒子家へ行つた。

千恵造ほどの幸福者があろうかと、兄弟等と思う。再び新しい妻を迎えることに成ったからだ。内地へ帰ってから一月も経たぬ内に話が起った。早く嫁を貰ってやらぬと、又何を仕出かすか分らぬという訳である。千恵造は貰うともいわず、貰わぬともいわず、例の煮え切らぬ調子だったが、見合用の写真を見るに及んで、些か食指が動いた様である。小唄歌いの市丸にそっくりの年増美人だと、三亀雄などは気が気でなかった。見合の結果、女の方が断った。人々は、その様な美人が何で千恵造の様なはきくせぬ男を好こうかといった。三亀雄はほつとし、その女が三十の今日まで独身だという以上は何か訳もあるに違いない、何とかその女

を金で動かして自分の妾にする方法はないものかと思うのだった。第二の候補者は美人とはいえなかった。が、処女であるという噂だった。年は二十六で、千恵造には若すぎる、が、とにかく見合をと、いうことになった。流石に千恵造は、今度はかなりめかしこんで見合いに出掛けた。纏った。

意外なことだが、千恵造はその結婚のことで、賀来子に相談したということである。まことに、怪しからぬ事である。千恵造は内地へ戻ってから、実に頻繁に別れた筈の賀来子に会っているのである。賀来子は南海沿線の天下茶屋に小ぢんまりとした家を借りていて、そこへ千恵造が出掛けていたのだ。賀来子が千恵造と一緒に内地に戻ったのも、このことをしめし合わせてのことだ

った。すべてこれらの手引きをしたのは船司である。千恵造にま
るめられてというより、むしろ左様な智慧を自発的に貸したのだ。
これらの事は、伝三郎の店員の口から、あとで洩らされた。その
店員は、千恵造の使いで、二三度天下茶屋の賀来子の家へ行つた
ことがあつたのだ。賀来子は日蔭者の身分に甘んじてまでも千恵
造と別れたくなかつたのであろうか、それとも彼の方で別れたく
なかつたのであろうか、どちらにしても、こんな男の何処が良い
のかと、人々はこの話をきいた時種々取沙汰した。が、それ程ま
でに別れ難いものなら、何故、別の女と結婚するのだろうか、千
恵造の真意は捕捉しがたいものがあつた。結局、両手に花のつも
りだろうか。賀来子が承知せぬ筈だ。――

——その通りだった。結婚したものでどうかと千恵造に相談された時、賀来子はいった。表面上別れているとはいえ、二人がいつまでもこんな風に会っていては、貴方の御兄弟にも義理が悪い。この際、潔よく別れてしまおう。そして貴方はその女の方と結婚して下さい。それが、貴方が御兄弟や姪御さんに尽すべき義務です。その女の方は綺麗な人でしようか、云々。

千恵造の三度目の結婚式は、三月桃の節句の吉日に挙行された。義理に迫られてという顔付きを千恵造はしていた。が、元来そういう顔の方が千恵造にはむしろ適わ^{「ふき」}しいのだ。殊にこの場合、彼がいそ^くとしていたら、所詮人々の蔭口をまぬがれぬところだ。

この婚礼には、実に多くの人々が新郎側として出席した。千恵造の四人の兄弟とその妻たちは無論だが、まつ枝、たみ子の姉妹とその夫たちも列席した。彼女等については今まで余り触れる機会はなかったが、彼女等はどちらかといえば、兒子一家とは余り交際しない。夫がそれ／＼技術家であつて、商人とはうまが合わないのだ。その外、春松夫妻が列席した。春松の嫁は、正月産れの赤ん坊を抱いていた。その赤ん坊の耳に綿がつめてあるのを、中耳炎だろうと、政江は観察した。千満子も列席した。これは人々の眼を引いた。千恵造への義理立とも見えた。伝三郎は「婚礼の見学やろ」とひやかした。伝三郎の妻は、せがまれて小唄を一つ唄い、拍手された。伝三郎は苦い顔した。伝三郎の妻は、千恵造

の結婚のために、随分金を使った。タンス、本箱、机、椅子、座蒲団、水屋、雨傘、洗面器の類まで買い与えたので、へそ繰りを全部投げ出した上に、借金が出来る始末だった。夫の弟のために尽すのは当然だという彼女の主義は、この頃政江を尊敬している伝三郎には甚だ面白くなかったのだ。が、千恵造の今度の妻は、伝三郎の妻を、夫の兄弟達の妻の中で、一番良い人だと直感した。その婚礼で一番嬉しそうな表情を自然に、隠さずに、泛べているのは伝三郎の妻だったから。本当といえば、喜ぶべきは第一に政江だが、彼女は、一座の觀察にかまけて、嬉しい表情を忘れていたのだ。一言いえば、政江は今度は余り金を出さなかった。

千恵造の妻に就ては述ぶべきことは余り無い。彼女は要するに、

不幸な女だ。千恵造は彼女の容貌よりも、肉体に飽き足らなかつた。賀来子と比較するからだつた。当然賀来子を想い出し、別れてしまった筈の賀来子に逢瀬を求めた。賀来子は避けた。千恵造はその理由が納得出来ぬまゝに、やがて、いわれも無い嫉妬に苦しみ出した。煮え切らぬ男として定評のあつた千恵造はこゝで、たんげいすべからざる情熱の男となつた。

ある夜、千恵造は再び賀来子と駆落ちした。婚礼の夜から三月程後のことである。人々の驚きと怒りは、説明するまでも無い事だ。兒子兄弟合資会社の一員という肩書だったが、千恵造は結局は月給七十円の会社の一会計係というに過ぎなかつた、その待遇にあきたらなかつたのか、あるいは、新しい妻が氣に喰わなかつ

たのかと人々は論議した。後者の方がむしろ真相に近いが、結局、総てを決したのは、賀来子の魅力だ。この魅力を、「弱き者の味方」という意地に置きかえることによつて、千恵造は些かヒロイズムを味つた。児戯に価することだ。が、そういう哀れな千恵造なればこそ、賀来子との腐れ縁が続けられたのかも知れぬ。

千恵造の出奔を切つ掛けとして、兒子家は以後多事多端であつた。

その一つ。権右衛門が統制違反で拘引された。沈没汽船引揚、及解体作業が完成して、愈々銅鉄品を売捌くに当つて、闇取引をしたのである。鉄線一貫目三十銭以上に売るべからざるを一円四十銭に売つたその他いろ／＼。「闇」をやらねば、幾らも儲から

ぬ事業だった。平野署に二十日間留置されて、権右衛門は帰宅した。留置中、彼は種々人生問題に就て、思案した。が、余り得るところもなかった。たゞ、一つ、之まで商売人は高く売るのが自慢だったが、今はそうでなくなつたということに就て、深く納得するところがあつた。一万円の罰金刑に処せられた。

その二つ。権右衛門の留置を機会に、政江は、「心靈研究」即ち、「神さん」に凝り出した。権右衛門の帰宅の日を「神さん」の先生がいい当てたのが動機である。「神さん」の先生は色魔ということだから、早晚、兒子家では、家庭争議があるだろうと専ら噂されている。この間の事情に就ては述べべきことが多いが、何れはありきたりのものだ。

その三。兒子千満子と某伯爵家次男との縁談は成立した。持参金は案外少くて、二万円だったということだ。

(十四、六、八)

青空文庫情報

底本：「俗臭 織田作之助『初出』作品集」インパクト出版会

2011（平成23）年5月20日初版第1刷発行

底本の親本：「海風 第五卷六号」海風社

1939（昭和14）年9月

初出：「海風 第五卷六号」海風社

1939（昭和14）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：小林繁雄

2012年8月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俗臭

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>